

## 豊かな人間性を目指して

著者	木越 康
雑誌名	真実心
号	35
ページ	145-181
発行年	2014-03-10
URL	<a href="http://id.nii.ac.jp/1108/00000475/">http://id.nii.ac.jp/1108/00000475/</a>

## 豊かな人間性を目指して

木越 康

どうも、こんにちは。これより宗教講座ということでお話をさせていただきます。

みなさん、あまり宗教行事は出られないですか。今、学長先生が『三帰依文』を読まれましたが、入学式以来でしょうか。こちらでは授業の中で宗教の話・仏教の話が必ずあるとお聞きしております。みなさんの京都光華女子大学は、私の大谷大学と同じ仏教の大学、特に真宗を元にした大学であります。宗教講座ということで、今日は『豊かな人間性を目指して』というタイトルでお話をいたします。この『豊かな人間性を目指して』というタイトルは私が付けたタイトルではなく、この講座そのものに付いている名前で、この講座を通して願われている課題であるということのようです。今日お話しする内容は、小澤先生のクラスでは授業で講義されているとお聞きしましたので、そのクラスの人は説明もできるし、もしかしたら実際に実践もできるかもしれません。内容としては「仏」と

は何なのか」ということです。仏になるために、さまざまな「行」<sup>ぎょう</sup>つまり実践が説かれま  
す。その中のいくつかを今日は紹介しますので、できれば、みなさんに仏になっていく実  
践をしてもらいたい、あるいは考えてもらいたいと思っています。

まずは宗教講座ということについてお話をします。

中学校、高校と付属校を上がって大学まで来ておられる方は、宗教や仏教にあまり違和  
感がないかと思えます。ただ、初めてこの大学に来て仏教に触れる人、あるいは宗教に触  
れる人は宗教や仏教とは「距離を置きたいな」と思っておられるかもしれません。先ほど  
の様子、三帰依文を聞いていると、どうも距離を置こうとしている人が、悪いわけじゃな  
いですよ、おられるように感じました。なるべく宗教に関わらないように、なるべく仏教  
に関わらないように、上手く卒業したいなと考えている方もいらっしゃるかもしれないで  
すね。

実は宗教は、元々は教育と非常に近い存在でしたが、近年特に日本では宗教と教育を切  
り離すようになっていきます。明治以降は特にそうですね。学校という現場の中で宗教教育  
を行っていくのは、特に公立の学校では禁止されています。みなさんご存じですか？ 教

豊かな人間性を目指して

育は教育としてしっかりと行う。宗教は宗教でそれぞれ関心があれば学べばいいし、なければいまま一生を過ごせばいいし、という扱いになっているようです。ところがこの大  
学もそうですし、私どもの大谷大学もそうですが、仏教を元にした教育、宗教を元にした  
教育をしようとしているわけです。今日はその宗教教育から少しお話をしていきたいと思  
います。

### 合掌論議

一冊の本を紹介します。『宗教をどう教えるか』という本です。これは東京の朝日出版  
から出ている菅原伸郎という方が書かれた本です。この菅原伸郎という方は、元々は朝日  
新聞の新聞記者で、あることがきっかけになって、学校現場で宗教をどうやって教えたら  
いいのか疑問を持った人です。この本は、学校現場で「宗教を教えるべきか、教えないべ  
きか」ということからスタートして、教育と宗教について考えている本です。宗教をどう  
教えるか、宗教と教育について朝日新聞の東京版で連載したものが、まとめて一冊の本に  
なっています。非常に面白い本なので関心のある人は読んでいただければと思います。京

都にもこの人は取材に来ています。光華にも来たかな？ 一〇年ほど前の本ですので分かりませんが、いろんな宗教系の学校、九州から、京都から、東京から、ずっと取材して菅原さんはこの本を書かれたそうです。

この方がなぜ宗教というものについて、特に宗教教育について関心を持ったかを説明します。「合掌」みなさんご存じですね。さきほど「合掌」の号令に沿ってみなさん合掌を行いましたね。この合掌について、「学校の中で合掌を行うべきか、行わないべきか」という議論があつたんです。これは富山県で起きた、ある意味「事件」と言ってもいいかと思えますけれども、「合掌論議」という問題です。これをきっかけに菅原さんは、学校現場の中で宗教教育をすべきか、すべきでないのか。すべきだとすればどういうケースが考えられるのかということについて考えられたのです。

みなさんの中に北陸の方はおられますか？ おひとりおられるようですね。関西ご出身の方は？ ほとんどのみなさんが関西なんです。北陸の方のご出身は何県ですか？ 富山ですか。では、富山で起こった「合掌論議」ご存じですかね。十年ほど前に起きた面白い事件なんです。どんな事件かというと、関西の方から公務員の方が富山に引っ越しをされたんです。関西と富山、かなり風土も違います。言葉も違うんです。富山の方は関西に

豊かな人間性を目指して

来ると言葉で苦勞されるんじゃないですか？ 私も石川の出身で、高校の時から京都に来ているのですが、言葉ではものすごく苦勞しました。気候も風土も全然違うんですね。さて、先ほどの公務員の方ですが、その方には中学校のお子さんがおられて、富山の中学校に転校されたんです。転校の準備の中で、お子さんが入学手続きに学校に行った帰りに、中学校から「入学のしおり」をもらってきたんです。その「入学のしおり」に書かれていたことに対して、その公務員の方がある疑問を感じたんですね。そして、校長先生に手紙を書いたことから「合掌論議」が始まったんです。どこに疑問を持たれたかと言いますと、日直の当番の仕事の欄にこういうふうを書いてあったというんです。

——お昼 先生の給食を準備する。「合掌」の号令をかける。

これが日直の仕事であるということですよ。みなさん、何か疑問を感じますか。どうでしょう。先生の給食？ 先生も自分で準備しなさいとか。僕はこっちの方が気になるんですが、この公務員のお父さんは合掌の方が気になって、校長先生に手紙を書いたんです。その手紙もこの本に載っていますので、ご紹介します。

——お忙しい毎日と存じます。富山県内の学校では給食や宿泊学習の食事の時に、合掌の号令をかけている場合が少なくありません。しかし合掌というのは、元来、仏教の礼拝形式です。これを公立学校で行うことは憲法第二十条、教育基本法第九条に違反します。

素晴らしいお父さんですね。合掌は憲法第二十条に違反している。教育基本法第九条に違反しているとご指摘なさっているわけです。そして続けてこうです。

——号令をかけなくても、「これから給食を始めます。いただきます。」「これで給食を終わります。ごちそうさま。」と言い換えれば、何ら問題はないでしょう。国際化が進み、県内にも外国からいろいろな宗教的信条を持った子ども達が来ています。ご議論の上、改善していただきますよう、お願いいたします。

こういうお手紙です。校長先生に、合掌の“中止”を要請するお手紙です。憲法第二十条、教育基本法第九条って皆さんご存じですかね。「信教の自由」を謳った法律です。国

豊かな人間性を目指して

民は何を信じようが、どのような宗教的心情を持つとかが、それをどのような形で教えようが、自由であるという「宗教の自由」を保障した憲法です。条文は「宗教は何人に対してはこれを保障する。いかなる宗教団体も国から特権を受け、または政治上の権力を行使してはならない」と決められているわけです。教育基本法も同じです。「宗教に対する寛容の態度、及び宗教の社会生活における地位は、教育上これを尊重しなければならない」。宗教を尊重する、信仰を尊重しなければならないと定められています。これが教育基本法の第九条です。あれ？　と思うかもしれませんが、この憲法が元で合掌が憲法違反だと言うのかというと、実は、この「宗教の自由」に関する憲法二十条・教育基本法第九条があるから、宗教を学校で教える、宗教的行為を行うのは憲法違反だと言われることになるんです。特に公立学校ではそうです。つまり、生徒は何を信じようが、何を説こうが、どんな宗教的信条を持つとかが自由であるため、学校側が一つの特定の宗教的儀式とか、特定の宗教的思想を説くのは禁止になるわけです。この人は合掌は仏教の礼拝形式だから、公立の学校で全ての生徒さんにそれを強要するのは信教の自由に違反するということなんです。クリスチャンもいれば、他にもいろんな宗教を信仰する方々がおられます。最近、新しい宗教もたくさんあるので、合掌を強要するのは憲法違反だと。だから、学校



の中からそういうものを一切排除するべきであるという、中止の要請を出しているんですね。なるほどと思うかもしれませんがね。そう言われればそうなんです。

この中止を要請された中学校は、とても困りました。富山県は信仰では仏教が強いですね。“真宗王国”って私あまり好きではない言葉ですが、そんな言葉があるんです。つまり、浄土真宗の門徒さんが非常にたくさんおられる地域です。滋賀県の北の方からずっと日本海側、福井県、富山県、石川県、新潟県あたりまでが、だいたい真宗王国といわれます。僕も石川県金沢の出身ですが、普通の公立学校の先生の中にもお寺の人がいましたし、実家がお寺なんです。先生の中に私の実家の門徒の方もおられました。みんな真宗、仏教を信仰しています。普通に合掌をしているはずですよ。ですから、富山の人に対して「合掌を中止せよ」って言われるととっても困るんです。この人がおっしゃる「合掌は元来仏教の礼拝形式である」は基本的には間違いないんです。元々あったものを仏教に取り込んだという経緯ですので、そういう誤りの問題もあるんですが、いずれにしても、みんな合掌を普通に行っているところに、こういう法律を元に憲法違反だと言われても、先生方は大変困ったようなんです。そこで、だいたい大事なことは職員会議で先生方が議論をするんです。合掌は憲法違反だと初めて聞くので、先生方もどうしていいかわからないわ

豊かな人間性を目指して

けです。ね。

議論したところ、先ほど言ったように、生活の中に当たり前に合掌があるので、先生方は結論が出ないんですね。みんな子どもの時から合掌してご飯を食べているわけです。私も、合掌しないとご飯を食べさせてもらえませんでした。みなさんは食事の前に合掌をしていますか。合掌している人？ 合掌しないという人いますか？ 三分の一くらいですかね。家で「合掌しなさい」と言われた事がある人は？ あんまり言われないんですかね。この学校ではどうでしょうか？ みなさん、小学校、中学校、どこで合掌の号令がかかっていたか覚えていますか。後でもう一回そのあたりを確認しますが、この富山県の学校は非常に困ったんですね。びっくりして職員会議を開いたんですけれども、合掌をやめて食事をするわけにはいけません。だけど、合掌を続けると、このキチツとしたお父さんがまた手紙を書くかもしれない。そこで、教育委員会に相談したんです。教育委員会で議論がなされたようですが、結果は同じなんです。みんな子どもの時から合掌をしていますので、急にこれが憲法違反だと言われても分からない。そこで、教育委員会で話がかかりますに、市議会、最終的には県議会まで話が行って、それが新聞で全国に報道されたんです。「富山県で合掌議論」。公立の学校で合掌するべきか、させないべきかが議論になった

ということが報道されて、それに先ほどの菅原さんが取材をされている訳です。全国どういう形で宗教教育をしているか、していないかという取材です。さて、結局県議会でどう結論が出たかというところ、結論はでませんでした。議員はいろんな方から票をもらって選ばれています。ですから、その人が「合掌は憲法違反だ」と意見を言うのと、「何を言っているんだ、この人は」と、富山では当然なるんです。だけど、「合掌をやるべきだ」と言うのと、県議会議員たるものが憲法違反を主張することになってしまいます。ですから、賛成もできないし反対もできない、という形になったのでしょうか。県議会で議論が膠着してしまつたようですね。だいたいそんな時に大人のやることは決まっています。「現場にまかせる」ということで判断を下す組織に下ろしていくんです。結果、結論が出ないまま「各現場にまかせる」ということで、各公立の中学校、高校に判断を委ねられたそうです。「合掌するのか、合掌しないのか、現場にまかせる」ところが、「合掌」だけが憲法違反として報道されてしまつたわけです。

その後、この菅原さんの調査によると、報道されて以降、富山県内ははじめ、北陸で「合掌を中止する」学校が増えていったんです。合掌をしないまま給食を食べて、合掌をしないまま給食を終えるというスタイルが広がっていったということです。この菅原さんはそ

豊かな人間性を目指して

ここにちょっと疑問を感じたというわけです。「これで大丈夫かな」と。

みなさん、中学校の時、高校の時、合掌をしたかどうか覚えていますか？ 合掌をしたという人、もう一度手を挙げてください。少ないですね。関西はものすごく少ないです。こんなに少ないのは初めて見ました。特に公立学校では合掌していないようです。みなさん、どうやって給食やお弁当を食べていたか覚えています？ 僕は本が出て最初に大谷大谷一回生のクラスで合掌をしていたかどうか聞いたことがあるんですが、三分の一くらいしかやっていませんでした。ある大阪の女子学生はこう言ったんです。「先生、うちの学校は、「よーい、はじめ」で食べた」って。給食の時に「よーい、はじめ」で食べる。そんな学校ありますか？ どう感じます？ 変だなあと思うでしょ。ですが、憲法違反をしない食べ方を、その学校の中で議論したんでしょうね。この話をしていた時に、さすがにうちのクラスの子たちも笑って、「よーい、はじめ」はおかしいやろ」って。僕も笑っていたんですけど、「ちょっと待ってよ。よーい、はじめ」でご飯食べるのはええわ。終わる時どうするの？」って聞いたんです。そしたらその学生が「やめー」です」と答えるんですね。先生が「よーい、はじめ」って言うのご飯を食べて、「はい、やめー」と言うをやめるんだそうです。すごいでしょ。合掌が宗教なのかどうかということは置いておき

ますけど、全くそういうものを排除してご飯を食べるとなると、「よーい、はじめ」で食べはじめて「はい、やめー」で終わるというスタイルが定着していくんです。笛でもいいですね。笛一回吹いたら食べ初めて、二回吹いたらやめる。同じです。この菅原さんがちよつと考えたのは、それで大丈夫なのかということなんです。その学校がそういうスタイルを始めると、子どもたちがそういうスタイルで食事をとるようになるんです。そういう習慣の子どもが、毎年毎年、輩出されていくようになるんです。家の中ではどうですか。朝お母さんが「よーい、はじめ」ってご飯食べはじめて、「はい、やめー」で終わって、学校に行くことになるんです。ですから、本当にそれでいいのかという問題が残るわけです。こういうものを排除していったところで、本当に子どもの教育が間違いないところで展開していけるのかと心配しているわけです。

このことについて僕も関心を持っていろんな所で聞いたりしているんですが、最終的に、すごいことを言い始めたお母さんがいると富山で聞きました。あるお母さんが、「うちの子には給食の時に、＼いただきます＼を言わせる必要もない」と言い出したんです。何故このお母さんがそういったか分かりますか。その理由は「もう給食費を払っているから」だそうです。既に給食費を払ってしまったから、この給食はうちの子のものなん

豊かな人間性を目指して

だと。だから、うちの子のものをうちの子が食べるのに、誰に対して「いただきます」を言わせる必要があるんだ、と言ったんです。みなさん、このお母さんの考え方をどう思われますか？ 合掌はおろか、「いただきます」も、お金を払っているから言わなくていいとおっしゃるんです。賢いでしょう、このお母さん。正しいでしょう。どうですか？ みなさん自分が学校の先生だったとして、目の前のご父兄がそう言ったとしたらどう答えますか？ このお母さんの言っていることは資本主義経済から言ったら正しいんです。このお母さんは、お金のやりとりの中で自分のものになったものにして「いただきます」を言わなくてはいけないのですかという、お母さんの筋で言っているんです。ですが、みなさん何か違和感を感じるでしょう。この発想は根こそぎ間違っているんです。どこが間違えているのかというのは非常に難しいですけど、みなさんが感じている通りですね。あの筋から言うのと正しいことかもしれません、人間の教育、人間とは何かを考えると根っこから間違えています。

宗教的なものをなるべく排除して教育をする。私の子どもが行っていた幼稚園も同じで、もう十五、六年前の話ですが、園のパンフレットをもらって帰ってきて見たことがあ

るんです。何て書いてあったかというと、「お子さまを、科学的な目で物事を見られる子どもに育てます」と書いてあったんです。どんな目なんですか、それ。科学的な目で物事を見たら、たぶん、「花がきれい」だとか、「空が青い」だとか、「春がさわやか」だとかいうふうには見られなくなりますね。花卉の数を数えたり、受精を観察したり、分解したり、いろんなことをする子になるのでしょうか、科学的な感覚で育てることが、本当に人間教育というものに、間違いない方向にその子を向けていけるのかというと、やはり、全く違う方向に向かっていくわけです。先ほど冒頭で言いましたように、広い意味での宗教と教育を完全に分けてしまうというこの問題とですね。教科教育だけをしていく。数学を教える、社会を教える、理科を教えることだけ徹底的にやっていて、子どもを成長させようという主義・方向の中で、本当にそれでいいのかということ、考えなければいけないと思うわけです。みなさんもたぶん、仏教の大学にいらっしゃるので、そのへんのことを踏まえながら勉強していかなくちゃいけないんですね。前置きはそれぐらいにしておきます。

豊かな人間性を目指して

自己満足から他者満足へ — 四無量心 —

それでは、仏教に基づく人間教育とは一体どういうことなのか。今日、講演のタイトルは付けなかったんですが、ねらいとしてはこのあたりです。仏教に基づく豊かな人間性とは一体何なのかを少し考えてみたいと思います。

仏教は基本的には仏陀の教えです。仏の教えを聞き、仏になることを目指すのが仏教の元々の考え方です。みなさん、仏ってどんな人だと思えますか。会ったことないから分からないですね。一番簡単に言うと仏とはこういう人と言われています。

—— 仏心というは大慈悲これなり。無縁の慈をもつて諸々の衆生を摂す。

『観無量寿経』

少し難しい言葉ですね。仏というのは、大きな、大きな、慈悲の心を持った人なんだと言っています。慈悲の心、これが仏です。慈悲というのは、慈しみ、悲しみのことで、こ



これらの心を持ったのが仏です。ですから、今日はみなさん、嫌か嫌でないかは分かりませんが、仏の心、慈悲の心を持つ練習をしてみたいと思います。

慈悲の心はどういう心かというところ、慈しみ、悲しみの心です。これを今日は身につける練習をしてみます。慈しみの心、悲しみの心と言ってもよく意味が分かりませんけれども、もう少し詳しく説明したのが四つの心のことです。四つの心とは、四つの無量の心ということになります(四無量心)。一つ目が「慈」という心、慈について無量の心を持つ。二つ目が「悲」という心、三つ目が「喜」という心、四つ目が「捨」という心、捨は捨てないということ。一番目の「慈」は簡単に言うと、「他者に喜び樂しみを与えたいとする心」です。それを「慈」と言います。他の人を喜ばせたい、樂ませたいという心を持つ、これが仏の基本です。みなさんにもそういう心があるでしょう。二つ目が「他者の苦しみを除いてあげたいと思う心」です。それが「悲」です。だから慈悲は簡単です。他者に喜びを与え、他者の苦しみを取り除くということ。これが慈悲の意味です。三つ目「喜」とありますが、これは何かと言うと、「他者の喜びを自己の喜びとする心」です。この三つを何を仏教は教えているのか。仏陀は一体何なのか。あるいは、仏を求めるとはどういうことか。結局、非常にシンプルなことです。

豊かな人間性を目指して

——自己満足から他者満足へ

これだけのことです。簡単でしょ。

通常、私たち人間は、“私に”喜びや楽しみを与えたいわけです。私が楽しく、嬉しく生活したいわけです。そして、なるべく“私は”苦しみたくない。自分が楽しみたいし、自分は苦しみたくないし、自分が嬉しいと自分が嬉しい。こういうのを自己の満足と言います。自分を満足させるために生きる生き方です。仏教を学ぶというのは非常に簡単なことなんです。この意識のスイッチを変えるだけでいいんです。自己の満足を求めるのではなくて、他者の満足を求めること。他人を喜ばせるために生きる。他人の苦しみを取るために生きる。他人が喜んでることが自分の喜びとなる。それだけのことです。そういう心を持たなくてはいけないんです。これが四無量心なんです。実はなかなか簡単なことではありませんね。

スイッチを入れ替えること、考え方はシンプルなんですけど、なかなかそういう心にはなれないですね。しかし、たぶん、みなさんに仏教を教えておられる先生方は、このスイ

ツチが入れ替わっているはずですよ。今度、授業で聞いてみてください。「先生は、自己の満足を求めて生きてますか、他者の満足のために生きていますか」って。先生方は仏教を勉強され、お釈迦さんの教えに従って生きようとしているはずですよ。さっき三帰依しましたでしょ。——みなさんも、うかうかと手を合わせて言いましたよね——あれはこのことを誓ったんですよ。「仏に帰依する」って言いましたね。「法に帰依する」つまり、仏の教えに帰依するとも。だから、みなさん、スイッチ切り換えますとってしまっただんです。「僧に帰依する」というのは、仏陀の教えに付き従って生きようとする人、その人を敬う、帰依しますということなので、みなさんは合掌して三帰依した時に、同時に、スイッチを入れ替えますって誓ってしまったんです。

そこで問題は他者の満足ですね。どうしたらいいか分からない。というのも、ほうっておいても私たちは自己の満足を求めるようにできていますからなかなかスイッチが切り変わらないんです。プリントの課題を見てください。

課題（1）一週間、「他者の喜びを与える実践」、これを心がけてみるんです。みなさん、この一週間ぐらいを振り返って、他者に喜びを与えるようなことが身の回りでありま

豊かな人間性を目指して

したか。「誕生日にお祝いをしてあげて、友人が喜んでいた？」いいですね。そういうことを周囲の人、全部の人に対してするんです。全ての人の誕生日にお祝いをあげる。ちょっと意識してみてください。そして二番目、「他者の苦しみを取り除いた経験」はありますか？ みなさん、今日、門を出て帰る時にこれを心に留めてみてください。「他者の苦しみを取り除く訓練」。私は今日から他者の苦しみを取り除くんだと思って電車に乗ってみてください。そうするとお年寄りが入ってきたら席を譲るかもしれませんね。あるいは堂々と座っている学生に「そこ、そちらの方に譲ってもらえませんか」と言えるかもしれません。次に、三番目「他者の喜びを自己の喜びとした経験」はありますか？ 他人が喜んでいる姿を見て嬉しかった。実はこれが一番難しいんですね。

課題(2) 振り返り―自己を見つめる―の方を見てください。こっちの方がみんな楽しく取り組みます。これまでの自分の過去を振り返って、(1)「他者の喜びを自己の喜びとすることができた経験」って何ですか。誰かが喜んでいるのを見て、私も本当に嬉しかった経験、ありますよね。次に、(2)「他者の喜びが自己の憎しみ妬みとなった経験」。他者が喜んでいるのを見て腹が立った経験はありますか？ こっちの方がピンとくるんじゃない

ないですか。なぜ他者が喜んでいると自分の腹が立つんでしょね。(3)「なぜ(1)で他者の喜びを自己の喜びとすることができたのか」を考えてみる。(4)「なぜ(2)で他者の喜びが自己の憎しみ妬みとなったのか」を考えてみる。中には笑っている方もいらっしやいますが、みなさんそれぞれ経験があるでしょう。

大学でこの課題をやってもらうと、だいたいクラブのことが出ますね。特に(2)は、僕にも経験があります。自分が試合でベンチに入った時に、友達が出て勝ってしまうと、自分のチームが勝ったのに嬉しくないという経験です。「わー、よかったー」って口では言ってますけど、心の中ではメラメラ憎らしくてしょうがない。心の中で「負けてしまえ」と思いながら応援していることってあるでしょ。特にクラブに入っている人とかは経験があるはずです。他者の喜び、自分の仲間の喜びが喜べない。何故かというと、自己の満足に繋がらないから喜べないんです。(5)「どうすればその憎しみや妬みを喜びの感情に変えることができるか」。これはものすごく難しいことですが、仏教ではこういう自分の心の動きとかを、ちまちま考えるんです。整理するために一度こうして書いてみる。特に(2)(4)(5)。これは楽しく書けると思います。書く人と人に見せたくないと思いません。

豊かな人間性を目指して

この前、ある女子学生がこの課題で面白いことを書いていました。「他者の喜びが自己の憎しみとなった経験…一緒に勉強していたのに、自分だけ赤点で落ちて、友達は試験を通った」。その時に憎らしかったっていうんです。何で他者の喜びが憎しみに変わったのかというと、二人は一度、一緒に赤点を取ったそうです。そこで、追試で一一緒に頑張ったのに相手だけパスしたから憎しみが増したとのことです。相手は試験が通ったことを自慢した。だから憎しみになった。「(5) どうすればその憎しみを喜びに変えることができるのか」。答えは見事でした。「相手も赤点を取ればいい」でした。これは僕自身の想像を絶する、恐ろしい回答だったんですが、まさに感情ではその通りですね。人間は、自分がどうかではないんです。相手が下がることで自分が喜ぶ、恐ろしいことだと思います。相手が何かを達成することで、自分が妬む、苦しむということが起きるんです。つまり自分だけではなく、周りと自分の関係の中でいろんな感情が起これるということです。しかし、先ほどの女子学生は、補足しておきますと「でも、本当は私が清らかな心になればいいんだ」と書いていました。そうすれば友達のを合格を喜べたと。本当は友達の方が夜遅くまで勉強していたんだと分かっている。それなのに彼女も赤点を取ればいいと思ってしまう自分がいる。だから私の心が清らかなければいいのについて、わかっているんです。とても面

白いなと思うので、一度、みなさんもご自身で振り返ってみてほしいです。どんな過去があつて、どんな形で自分の感情が動いているか。その中で「四無量心」はどれだけ難しいことを言っているのかが分かります。

しかし、大切なことは、ただ、心のスイッチを入れ替えることを自分で決めるといふことです。今日からは、私の喜びではなくて、他者に喜びを与えるために生きるんだと。今日からは私の苦しみを取り除くためではなくて、他者の苦しみを取り除くために生きるんだと。今日からは、他者の喜びを自己の喜びとして生きるんだと。心のスイッチを入れ替えることは、シンプルで、単純で、簡単なことだといつもお話するんですが、本当は大変なことですね。でも、幼稚園、小学校、中学校、高校から、教育の現場ですつとこういうことを言い続けていると、人間少しは変わると思うんです。人は何のために生きるのか、人間が人間として生きるとはどういうことかというところ、実はこういうところにあるのではないかと思います。どれだけ良い学校に入って、良い会社に入って、良い給料をもらって、良い相手を見つけて、良い家に住んで、良い老後を過ごしたとしても、すべて自己満足です。そうではなくて、そういうことを通してでも、人間は全て他者の満足のためにあるん

豊かな人間性を目指して

だということをずっと学んでいけば、多少は社会がましになるような気がするんです。

### 他者に与える ― 六波羅蜜 ―

こういう四つの無量の心、他者に喜びを与えたい、他者の苦しみを取り除きたい、他者の喜びを自分の喜びとしたい、ということがあるんですが、この概念はなかなか難しいので、六波羅蜜ろくはらみつという実践があるのです。六波羅蜜という言葉は難しいので覚えなくていいですが、布施ふせという行ぎょう、あるいは、戒律を守るという行をするわけです。これは全て、四つの無量の心とセットです。四つの無量の心を完成させるための実践です。布施をする、戒律を守る、堪え忍ぶ、努力をする、精神統一、集中する、そして、智慧を体得するということ。今日は「布施」についてのみお話しします。

これはそんなに難しい実践ではありません。「布施をする＝他者に与える」という意味です。他者の苦しみを取り除く、全て「他者」です。インドの言葉で「ダーナ」と言います。ダーナとは、日本の旦那さんという言葉がありますね。旦那さんは布施をする人なの



でそのように言うようです。ダーナは他者に与えることの実践です。何を与えるか。何でもいいですよ。例えば、「財施<sup>ざいせ</sup>」っていうのがあります。財施<sup>ざいせ</sup>って何かと言うと、金銭もそうですけど、衣食住の提供も含まれるようです。あるいは「和顔施<sup>わがんせ</sup>」、笑顔<sup>わ</sup>を他者に与える。他者に喜びを与え、苦しみを取り除くために、笑顔<sup>わ</sup>を他者に布施する。これも立派なダーナになります。あるいは、「言辞施<sup>げんじせ</sup>」というのがあります。言葉を相手に与えることによって、相手の苦しみを取り除いてあげる。言葉を相手に与えることによって、相手に喜びを与えてあげる。これも立派な布施です。あるいはこれが一番大事なんですけど、「無畏施<sup>むゐせ</sup>」って言うんです。恐れのない状態を相手に与える。これも布施です。

金銭を与える財施は難しいかもしれません。みなさん、アルバイトをしていますか。アルバイトのお金は何に使っていますか。服とか買っていますか？ それは誰の服ですか？ 自分で自分の服を買うんですか。人に服を買ってあげなさい、ということなんです。アルバイトのお金は他に何に使います？ 服買って、後は何するんですか。欲しい物が出てきたら使う。誰が欲しいものですか。自分に使うのではありません。友達に「今日、バイト代入ったから何欲しい？」って言わないといけないんです。それが布施なんです。簡単なことです、スイッチを入れ替えるだけです。だから非常にシンプルで単純です。例えば給

豊かな人間性を目指して

料日、先生方に「先生、ダーナしようか」って言ってもいいですね。バイト代が入って「おいしいもの何食べたい？」と聞くこと、スイッチを入れ替えるとはそういうことなんです。全部他者のためです。

また、和顔施、言辞施、無畏施、これはバラバラではなくてセットで行われます。例えば、どんな恐いお兄ちゃんも、迷子の子をさどす時には和顔施、言辞施、無畏施、これらをやっています。迷子で泣いている子がいる時には、しゃがんでニコニコしますよね。笑顔で近づいて、優しい言葉で「どうしたの」って言いますよね。恐い顔して近づいて「何やねん、おまえ」って言う人はいないわけです。自然に、和顔施、言辞施の布施が行われるんです、何故、和顔施、言辞施が行われるかと言うと、無畏施のためですね。恐れている子どもに「大丈夫だよ。全然恐くないから大丈夫。お兄ちゃんはこんな恐い顔をしていくけど恐くないんだよ」と示すために、和顔施、言辞施が自然に出てくるんです。そういう時に人間は布施の実践をしているわけです。

## 私が今、身体を使うべき場所 — 福田 —

『豊かな人間性を目指して』、仏教を元に、自分自身が豊かな人間性を指すとするならば、ちよつとこれは考えなくちゃいけないですね。仏陀が四無量心の人だと言われて、仏教の教えではこの四無量心が大事だと言われる。スイッチを切り換えるということですが、発想は非常に単純なことです。敢えて言えば簡単なことです。だけど、できない。非常に難しいことなんです。

なぜこのような形でダーナ（布施）が強調されるかということ、やはり、仏陀という人の言葉・教え、あるいは仏陀自身が、“他者のため”と語られるような生き方をしていたと言われているからです。

資料④ですが、これは『ジャータカ物語』です。基本的にインドには輪廻転生という生まれ変わり死に変わりの思想があるんです。仏陀も幾度となく実践を行い生まれ変わり、尊い行を繰り返した結果、我々の時代に仏陀として登場してくださいと理解されるわけです。そして仏陀がなされた数々の尊い行が物語になって、『ジャータカ物語』にな

豊かな人間性を目指して

っています。

この資料④が仏陀のなされたダーナ（布施）の象徴的な内容になるんです。どういう場面かというところ、青年だった仏陀が森の中でトラに出会った。そのトラは、子どもを産み落としたばかりのお母さんトラです。子どもがお腹にいたのでずっと狩りにいけず空腹でしたが、ようやく自分の子どもを産み落とした後は、しかし体力を消耗しきって狩りに出ることができなくなっています。子どもにおっぱいを与えたくとも、お母さんトラは、空腹でおっぱいが出ないわけです。このままでは、お母さんは狩りに出れなくて死にますよね。子どもはおっぱいが飲めなくて死ぬわけです。両方死んでしまいます。これは大変な問題ですね。さて、このお母さんトラは、どうしたでしょうか。非常に辛い決断を下してしまうのです。子トラを食べるといふ決断です。「ええ」って思う人もいるかもしれませんが。でも、お母さんトラは、このままでは両方とも死んじゃうわけです。子トラを食べて、自分自身の体力を回復してまた新しい子を、というふうに考えたんです。そこに青年であった仏陀が出会ったんです。みなさんだったらどうしますか？ 弱った母トラと、子トラ。母トラを殺して毛皮にして売って、子トラを動物園に売る。儲かりますね。さて、仏陀はその時に、次のように考えたんです。

——私はきわめて遠い過去から生死を重ね、数え切れないほどにこの身体を捨ててきた。あるいは貪欲(とんよく)(自分の自己満足)のために、あるいは瞋恚(しんに)(怒り・腹立ち)のために、あるいは愚癡(ぐち)(自分自身の愚かなものの考え方、自己中心的な考え方)のために、まったくいたずらに身と命を捨ててきたが、いまだかつて真理のために捨てたことがない。今こそ福田(ふくだん)に遭遇した。この身体は何のためにあるのか。

「今こそ福田に遭遇した」は、母親が子どもを食べようとしている場面です。これが福田だと言ったんです。この青年は何をしたかというところ、今こそ自分の身体を使うべき場所だと判断し、母トラに自分の身体を差し出して食べられてしまうのです。それで母トラも子トラも助かったというんです。これが最大のダーナです。これ大変なことですよ。スイッチを入れ替えるところなるんですよ。さつき、「スイッチ入れ替えよう」って百人に一人ぐらい思ってくれたかもしれません、スイッチ入れ替えたらこんなことになるんです。でも、これが仏陀の言っている無量の心、完全なダーナです。

先日のニュースで、線路でお年寄りが倒れているのを発見した四十代の女性が、飛び出してお年寄りを助けられた結果、ご自身が亡くなってしまったという話がありましたよ

豊かな人間性を目指して

ね。たぶん、この女性の方は、その時は何も考えずに飛び出してお年寄りを助けられたのでしようし、世間では非常に素晴らしい行いだと言われていますが、複雑な思いがいたします。だけど、その方は、こういう方だったのだと思います。「今こそ福田」この身体は何のために使うのかというタイミングに遭われたのでしょうか。だから飛び出されたんだと思います。みなさんこういう「福田」に気づきますか？ 例えはさつき電車の話をしました。自分が疲れて阪急電車に乗りますよね。自分は何とか座れましたが満席だとします。向こうからお年寄りが乗ってきます。その時に、「今こそ福田だ」と思うか、「うわ、ヤバ」と目をつぶるか、どっちでしょうか。微妙な所ですね。そこで、仏陀の話を出し、「ああ、これが仏陀のおっしゃる福田なのか」「ここが私が今、身体を使うべき場所なのか」と少しでも感じるか、「今は目をつぶる場所だ」と感じるか、ということ。非常に小さなことですが、自分の生活の中でどういう福田を見つけるか、出会うかということ。です。

前にこちらで講演をさせていただいた時に、幼稚園の子どもさんが多くいらっちゃったので、アンパンマンの話をしたのですが、アンパンマンの行いはまさに今の話の通りなん

ですね。アンパンマンは福田のたびに、頭を削って人に食べさせているでしょ。そしてボタンと倒れる。他者のために毎回自分の命を投げ出しているんです。基本的にアンパンマンの行為は全て他者のためです。アンパンマンは「他者のため」ということを言わずに「愛と勇氣」と言うのですが。つまり、アンパンマンは四無量心を持っているんです。他者に喜びを与えたい、他者の苦しみを取り除きたいと思つて飛んでいるんです。アンパンマンも他者が喜んでると嬉しいのでしょうか。しかも、先ほどの補足ですが、全ての他者に対して平等の心を持つて、そういうような活動をする。これが四無量心なんです。

今日、「豊かな人間性」ということでまずお話をしたいのは、スイッチの切り換えということだけなんです。自己を満足させたい気持ちには、当然僕も持っています。普通そうなんです。自分は楽しく生きたいし、苦しみを遠ざけたいという心を持ちながら生きています。しかし、そういう自分にちよつと疑問を持つて、少しスイッチを入れ替えてみる。あるいは、スイッチを入れ替えてみなさいと言っている人がいると考えるとみる。そうするともしかしたら、社会へみなさんがこれから出て歩くときに、風景が違うように見えるかもしれません。電車でお年寄りに出会った時、お腹の大きなお母さんに出会った時、泣いている人に出会った時、苦しんでいる人に出会った時、その風景がこれまでと違って

豊かな人間性を目指して

見えるかもしれない。自らの身を差し出す福田に見えるかもしれない。そのことを少し考えてもらいたいということ、もう一つ大事なことは、そうは言っても、やはりできないということ。結局、僕らは自分の満足しか得られない人間なのです。

### 気づき — 慙愧と懺悔 —

今お話しました、資料でいう①、②、③、④は、四無量心、他者への心です。それを、実際振り返ってみるのが、課題（1）、課題（2）です。ところが、今までお話したとおり、実際はとても難しいんです。僕らはどうしても自分のためにしか生きられないし、ほっといても自分の喜びを求めるようにできていますね。そういう時に仏教・お釈迦さんはこういう言い方もします。「慙愧」とか、「懺悔」ですね。

四無量心を保て、六波羅蜜を保て、徹底して他者のために生きろというのですが、できない人間に対しても大事なことを教えてくれる。これは何かというと、「恥じる」ということです。できない自己を恥じて悔いるということです。こんな偉そうなことを言っていますが、僕も実は電車で寝ているふりをしたことがあるんです。そうすると、気分悪いで



すよね。お年寄りが立っているのに平気ではいられないでしょ。その時に心の中で何を思っているかというと、自分を恥じていますよね。「おれ、何てひどいヤツなんや」と降りてから悔いますね。あるいは、僕より先に若い子が席を譲ると「あ、しまった」と思いますが、すよね。「なんでおれ、あんなふうに生きられないんだ」と思います。しかし、仏陀はこの四無量心・六波羅蜜が大事だと説くと共に、もう一つは、この「恥じること」「悔いること」が非常に大事だと伝えていくんです。そのことができなかった自分を恥じる。そのことができなかった自分を悔いる。この恥じるとか、悔いるということが、またその人を新しい自分に育てていくんです。

資料⑤は『涅槃経』というお経です。親鸞もご自分の著書の中に引用されていますが、これは、インドのある王様が自分のお父さんを殺害したという事件です。そして殺害したことを後悔して病気になるってしまった。お父さんを殺したわけですから、ものすごい病気です。さらにお父さんを殺して母親を剣で切り殺そうとしたんです。その人に対しての教えです。

——二つの白法（仏陀の尊い教え）あり、よく衆生を救く。一つには慙、二つには愧

豊かな人間性を目指して

なり。「慙」は自ら罪を作らず、「愧」は他を教えて作さしめず。「慙」は中に自ら羞恥す(自分自身を恥じる)、「愧」は発露して人に向かう(人に対して自分の恥をさらす。自分の間違いを晒す)。「慙」は人に羞ず、「愧」は天に羞ず。これを「慚愧」と名づく。「無慚愧」は名づけて「人」とせず(慚愧しないようなものは人間ではない)、名づけて「畜生」とす。慚愧あるがゆえに、すなわちよく父母・師長を恭敬す。慚愧あるがゆえに、父母・兄弟・姉妹あることを説く。善いかな大王、具に慚愧あり、と。

こういう内容です。つまり、この息子はお父さんを殺したことを恥じている。悔いて病気になっているんです。仏陀の言い方からすると、恥じている、悔いているということは、お父さんをお父さんとして大事に思う心があるということなんです。お父さんをお父さんとも思わず尊敬しなかったら、殺そうが、死のうが平気なわけです。ですけど、この息子はお父さんを殺したことが元で深く悔い、大きな病気になっているわけです。辛いですよ、もちろん。だけど、あなたは慚愧があるから、やはりお父さんのことを大事に思っている、お母さんのことを大事に思っているんだと言うんです。慚愧が大事で、慚愧があなたが人で

あることの証明だと言うんです。だから、すべて「六波羅蜜・四無量心を実践して、仏になれ」と言っているわけではないですね。それらの実践によってスイッチを切り換えるのは非常に大事ですが、みなさん全員が他者満足になって、そういう生き方をすると、この京都光華女子大学の人気は絶大でしょうね。すごい大学だということになります。全員が他者のためにアルバイトをしている。全員がお金が貯まったら「何が欲しいですか」と町で聞いてまわっている。全員が言辞施をしている。全員が和顔施をしている。全員が無畏施をしているとなったら、すごい大学だと思えますけれども、それはなかなか難しいです。だけど、もう一つの方法、それをできない自分を悔いる、恥じる心を持つてるか、それが大切なことです。資料⑥も資料⑦も仏陀の同じような言葉です。

——もし自ら犯あることを知らば、すなわちまさに自ら懺悔すべし。

#### 『四分律』

もし自分自身ができないと自覚した時には悔いるべきだ、恥じるべきだ、これが大事ななんだと。あるいは、

豊かな人間性を目指して

——もし懺悔して慚愧を懐かば（悔いる、恥じるといふ気持ちを持てば）、罪すなわち除滅して清浄なること本のごとし。

『涅槃經』

これは難しいですね。席を譲れなかつた罪が消えて、清浄となつていく。次には譲れる自分になれるかもしれません。五年、十年と時間がかかるかもしれませんが、少しでもできない自分を慚愧する、恥じる思いがあれば、そういうふうな自分になつていく可能性があります。

資料⑦は最後に、一番古い言葉です。何でこの言葉を一最後に載せたかというのと、さっきの女子学生の言葉で、「相手が赤点を取れば私も嬉しい」と言いながら、でもやはり違ふと、自分の心が清らかにならなくちゃいけないと。相手は夜遅くまで勉強したんだと、そう考へて書き換へた。そういうエピソードをご紹介しましたが、それもこの仏陀の言葉に当てはまるのではないでしょうか。

——もし愚者が自ら愚であると考えれば、すなわち賢者である。

慚愧、懺悔を抱く。自分はダメなんだ、自分ではできないんだということによくよく目覚めると、その人は賢い者となるという言葉です。この言葉が、その学生さんのレポートを通しての結論としておきます。

## 最後に

今日は、二つのことを言いました。

まず一つはスイッチを入れ替えてみるということです。他者満足ということ。四無量心、覚えられる人は六波羅蜜でもいいし、もう全然、覚える気も何もない人は、「スイッチの切り換え」ということで結構です。「他者のため」ということを仏陀は、強く、強く、説いたということが一点です。

もう一点は、できない自分を慚愧する、懺悔することが、実は自分自身を変えていく第一歩だということです。これからの学生生活において、この大学は仏教、宗教の大学です

豊かな人間性を目指して

ので様々な学びの中で、できればそういう自分を育てていってくださればありがたいなと思います。

今日はこれで終わりにさせていただきます。どうもありがとうございました。

——二〇一三年二月二三日——